

CONTENTS

広報

ななほ

2010 No.74

11

● 目次

- 2 ひと人ひと (姥浦昭二さん)
- 3 七尾市文化産業賞 受賞者紹介
- 4 特集 海を越えた心の絆
～七尾市金泉市中学生交流～
- 10 情報ランド (お知らせ)
- 17 ねんりんピック石川 2010 (結果)
- 18 みんなの本棚 / 児童館へ行こう
- 19 イベント情報
- 20 広がれ! 市民のわ /
市長コラム / 市長談話室
- 22 市民相談
- 23 休日医療情報 / 不用品活用銀行
- 24 まちの顔
- 26 イタリアボローニャ国際絵本原画展
わが家のアイドル

今月の表紙

「赤ちゃん登校日」とは、赤ちゃんが学校にやってくるというユニークな取り組み。昨年、高階小学校で行ったのが初めて。今年は、高階小学校と石崎小学校で行われた。

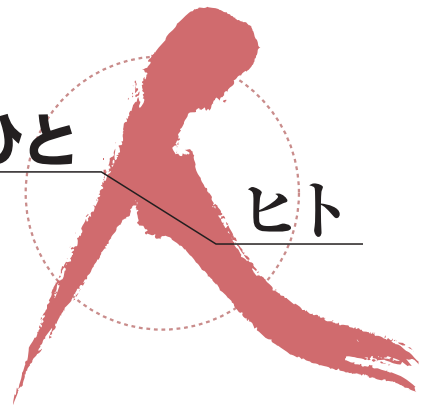
9月10日(金)に初めて赤ちゃんを迎えて、今回が2回目。石崎小学校5年生の児童は、1回目は慣れない、恥ずかしいといった気持ちだったが、2回目は慣れた様子。しかし、赤ちゃんが大泣きすると戸惑った様子も。

「赤ちゃん登校日」は、人の心と真剣に向き合うことを学ぶのが目的。初めて親もわが子とのコミュニケーションの関わり方を学び、親子で真剣に向き合うことを学んだ。

今後、「赤ちゃん登校日」が実施される学校が増えることを期待したい。

ひと

ヒト



青少年に、挑戦する チャンスを与えたい

姥浦 昭二さん 70歳
(古府町)



「自分のできる範囲で、社会に恩返ししたい」。今から10年前の還暦(60歳)を記念して、毎年1,000ドル(米ドル)を七尾市国際交流協会に寄附している姥浦さん。そこには国際交流への熱い思いがあり、自らの体験に基づいた3つの大きな出来事が隠されている。

第1に、自分がアメリカで言葉の壁を経験したこと。港を生かしたまちづくりを学ぼうと、昭和61年に七尾マリシティ推進協議会でモントレイ市を訪問。英語が話せないばかりに孤立感を味わった。

第2に、留学していた娘さんの成長を実感したこと。ロータリークラブの交換留学生としてアメリカで暮らしていた娘さんのもとを訪れ、短期間での語学力向上に驚くと同時に、若い力の可能性を感じた。

第3に、自分が病気をしたこと。

46歳のときにガンを患い、腎臓を切除。大好きだったタバコをやめた。1年間に吸ったタバコの金額を計算すると約10万円だったことと、英語へのこだわりもあり、米ドルに換算することを思いついた。

寄附する日は毎年決まって2月6日。結婚記念日であり、自らが代表を務める会社の創立記念日でもあるというからしゃれている。

「多くの人に子ども頃から生の英語にチャレンジしてほしい。国際社会に対応できる青少年育成に賛同していただける方がいれば、ぜひ一緒に協力してもらえれば」と国際交流への思いは尽きない。

※姥浦さんの思いは「七尾市青少年国際交流奨学金」として、今年度行われた「七尾市金泉市中学生交流」(本誌4ページ参照)や「ユニシア・ウイングスInアメリカ」(七尾青年会議所主催)など、七尾市内の青少年がさまざまな国とのふれあい交流を行う際に役立てられている。

平成22年度 七尾市文化産業賞

～本市の文化産業の振興発展に尽くされ、
特に功績が顕著な方に贈られるもの～

でか山に生涯を捧ぐ



本田 幸治氏
(満71歳) 魚町

七尾を代表する随筆家



小林 良子氏
(満73歳) 馬出町

平成11年、国の重要無形民俗文化財の「青柏祭の曳山行事」(以下、「でか山」)を行う山町の一つ、魚町でか山保存会の総代に就任。翌年には、それまで山町から選出されていた会長を「七尾市長とする」ことを懇請し、行政との共同体制を確立。自らは青柏祭でか山保存会の実質上の責任者である会長代行として、三町の協力的体制をまとめ組織強化に努められています。

平成16年には、「全国山・鉾・屋台保存連合会」の総会が本市で盛大に開催され、でか山を通して七尾の情報発信を行っています。

地域では、平成8年から12年間魚

昭和49年から60年までの間、七尾市社会教育指導員、七尾市婦人教育専門員として、文化活動の指導に携わり、その間、種々のボランティアグループ誕生に協力。県内初の「ボランティアアグループ連絡会」の結成に尽力されました。

『郷土の歴史・文化には、地域社会を知り、ペンを執って考え行動する』をモットーに実践。「ふるさと散歩」、七尾市観光パンフレット、豊年太鼓の歩み「ふるさとの響き」、七尾城址文化事業団記念誌「ふるさとの味、能登の味」など、数々の執筆編集をされています。

平成に入ってから、現在も継続

町町会長として尽力し、地区町会連合会会長などを歴任。現在も地区防犯協議会会長として地域安全活動を行うなど、文化財保護だけでなく地方自治の発展や地域に対する熱意と行動力は、他の模範といえます。

【本田さんの「コメント」】
高校卒業後、でか山にかかわり53年。総代になってからは、運行上の安全確保はもちろん、若い人の減少や「人形師」の後継者問題など年中心配事ばかり。それでも、関係者が一致団結して、先人から受け継がれた伝統を次の世代に引き継いでいきたいと思っています。

している「メディアカルサロン・なお」の編集、エッセイ季刊誌「風媒花」の主筆、昨年は「七つ尾」で「能登畠山家創立600年によせて」として、七尾の文化風土を描くなど、七尾を代表する随筆家といえます。

【小林さんの「コメント」】
「書くこと」は自分の考えが活字になって残り、それがたまたま節目ごとに認めてもらっていたように感じます。これまでは周りの方々に助けてもらって自分のやりたいことをやってきたので、年齢を肯定しながら、自分にできる役割があればお手伝いをさせてもらえればと思います。